

【目的】

非行少年は年々減少傾向にあるが非行少年がいなくなるわけではない。その少数の非行少年の矯正・更生教育が課題である。本研究は、自己の葛藤や問題を外へ出すという見方から現代の非行少年は内面化され、それが人間関係によって引き起こされているのではないかと仮定し、アタッチメントや発達障害を踏まえ考察していく。

【第1章 非行少年について】

非行少年の実態は時代と共に変化している。犯罪白書令和4年度版によると、非行少年は全体としては減少傾向にあり、平成24年以降戦後最少を記録し続け、令和3年は戦後最少を更新する2万9802人であった。人口減少に伴い土井(2013)は、少年犯罪の減少は非行を学ぶ機会が失われているからとし、社会学の観点から文化学習理論で説明している。また土井(2013)は、少年犯罪の減少の背景に宿命主義の広がりがあるのではないかと主張している。宿命主義とは、最初から期待しなければそこには希望が生まれることもなく、希望が裏切られることもないという心性である。この「それが自分の宿命なのだ」という諦めの感情が、現在の非行少年のもつ重要な感情であり、それが一般的な少年たちに広まっているのは非行を行っていない少年たちが非行の道へ陥る原因になってしまうのではないかと考える。少年犯罪が集団で行われることが多いことについて土井(2016)は、同調圧力の強さが逸脱行動から遠ざける要因と推察している。今も昔も同調圧力は存在している。昔の同調圧力は教師や親など共通の敵がいた事でその敵を対処しようとかかる同調圧力である。よって当時は共犯が多かった。しかし現代には共通の敵となる者はなくなった。また、コミュニケーションが重要視される世の中で、現代の若者たちは、世代内のわずかなズレでも必要以上に目立つようになり他と同じでなければ、他の人との差異が目立ってしまう。その差異を目立たせないように「他の人と同じでいなければならないのだ」という同調圧力がかかっている。仲間集団における同調圧力の高まりについて論じるなかで、特殊学級(支援学級)の数急増について、学習に問題を抱えた児童生徒よりも、人間関係に問題を抱えた児童生徒たちが在籍していることに触れている。以上の事から、現代の非行少年の課題の一つとして人間関係が考える。人間関係形成において重要なことは母親及び養育者との基本的信頼感、アタッチメントが土台として考えられ、乳児期に母親及び養育者とのアタッチメントに問題を抱えるとその後の人間関係にも影響を及ぼすと考える。非行少年の内面的理解として、アタッチメント(愛着)、発達障害を中心に考えていく。

【第2章 アタッチメントとは】

ボウルビィ(Bowlby,J)のアタッチメント理論は、マターナル・デプリケーション(母性的養育の剥奪)の研究から始まり、精神分析学に比較行動学を取り入れて提唱された。この研究の中でボウルビィは乳児と母親との人間関係が精神衛生の根本であると強調した。ウィニコットは母親と赤ん坊の関係性を基本にし、母親の在り方を「環境としての母親」と「対象としての母親」と呼び、母親は二つの側面があると考えた。環境としての母親がきちんと機能している場合は、母親は赤ん坊を「抱えること」ができ、時には失敗することがあっても、基本的には抱えているので「ほどよい母親」である。「抱えること」は文字通り物理的に抱えること(抱っこ)であり、相互的なコミュニケーションが成り立っているということであり、赤ん坊が母親に対して信頼を感じているという事でもある。高井(2006)はウィニコットの対象関係論を取り上げ、非行行動をやめて約3年経過して現在社会生活を送っている人を対象に、半構造的インタビューを行った。調査結果から高井(2006)は、非行行動に至る背景は異なっていたものの、非行行動を環境への希望として捉えるならば、安定した二者間関係の切望と解釈できるとした。ほどよい母親に抱えられることで、アタッチメントが成立し、安定した二者関係を形成できる。反対に、ほどよい母親に抱えられない場合には、アタッチメントが不安定になり、安定した関係を求めて反社会的な行動を起こす。すなわち、非行少年を抱えるのは保護観察官であり、保護観察官とは、ほどよい母親の代わりになるという事ではないかと考えられる。反社会的行動を起こした非行少年が、ほどよい保護観察官に抱えられると、(母親が)常にそばに入れられるという安心感からアタッチメントが安定し、人間関係も安定するので、再犯が抑制されると考える事ができる。また、二者関係を成立させるには、相互の適切な理解が必要である。しかしなが

らその理解を阻害している要因があり、その一つに発達障害が挙げられる。

【第3章 発達障害】

発達障害があるとほどよく抱えにくいことが言える。日本自閉症協会(2023)によると、発達障害を持つ人は社会的な関係のもちづらさやコミュニケーションの困難さをもつ。それにより、他人の感情を察する事や自分の感情を読み取ることが難しいことや、他者からの愛情を感じ取ることが難しく、関係を形成しにくい。発達障害を持つ非行少年は、集団活動への参加の難しさやそれによるトラブルにより、対人関係の傷つきを繰り返してきたため、不信感もち、不公平感ばかり膨らみ、周囲から孤立し、非行行動に至る傾向がみられる。加え、対人関係における成功体験が少なく、対人トラブルなど傷つきなどの経験から、自尊感情が低下し、加えて言語化などの自己表現が難しいことから内側にストレスをため込んでいる。人から認められた、人の役に立ったなどという経験が少ないため、自己肯定感が育ちにくい。また、人とのつながりを継続して維持するという信頼関係の結び方が難しいため、自分を理解し、支えてくれる人を欲しており、安心感を得られる環境整備や職員との関係の構築が求められる。

【結論】

非行少年は、母親と乳児の絆が土台となり他者との関係性を広げられるというアタッチメントの観点と、ウィニコットの対象関係論から「抱っこ」をされているという安心感から環境と関われることわかった。抱っことは、母子の特別な関係性のことであり、乳児に安全と安心を与え、母親とのコミュニケーションと乳児が母親に対し信頼を寄せている状態のことである。しかし、非行を起こす少年の中には抱えられている状態ではないため、安定した二者関係を求める事や、環境を変えたいという希望から非行行動へと進む者もみられる。また、発達障害を持ち、周囲とのコミュニケーションがうまく取れず、自己の葛藤などをうまく表現できずに非行行動をとる少年もみられる。発達障害の有無にかかわらず、親からの愛情を十分に感じられることで、非行行動をとる少年は少なくなるのではないかと考える。保護観察官や非行少年に関わる職員は、発達障害を持つ少年に対する対応として、「抱っこ」が挙げられる。少年の声に耳を傾け、感情を引き出すことや言語化の手伝いを行うなど、それらを連続的に行う事で二者関係を構築することができると思う。また、発達障害を持つ少年は、他人の感情を察する事や自分の感情を読み取ることが難しい等の困難さを抱えていることが多く、発達障害を持たない少年に比べ関係を形成しにくい。少年が分かるように褒める事、成功体験をさせること等を行い、今までの人間関係での傷つきからの自己有能感や自尊心の回復を計ることが必要と考える。

【引用文献】

土井隆義(2013).後期近代の黎明期における少年犯罪の現象-社会緊張理論と文化学習理論の視点から-.犯罪社会学研究.38 卷.p78-96.

土井隆義(2016).リスク回避する若年層、危機回避する高齢層-一般刑法犯検挙人員の動向が意味するもの-.犯罪社会学研究.41(0).p10-25.

法務省(2022).令和4年度版犯罪白書.法務省総合研究所編.

一般社団法人日本自閉症協会.2023.自閉症スペクトラム症(ASD)とは. <https://www.autism.or.jp/about-autism/>.(2023年12月13日).

高井千鶴(2006).非行行動と心理的要因について -対象関係論的視点から-.国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要.6.p21-32.